

ファンケル ニュースレター

2011.7.11 Vol. 22

ご質問・お問合せ(担当 広報・油井)

TEL 045-226-1230

FAX 045-226-1202

HP www.fancl.co.jp

〒231-8528 横浜市中区山下町 89-1

東日本大震災の復興を応援するファンケルの取り組み 今、わたしたちにできること ～“美と健康の Save the 東北プロジェクト”を通じて～



【写真】現地の避難所で子ども達に青汁を提供するファンケル従業員

私たちのこれまでの価値観を根底から揺るがした2011年3月11日の出来事から、ちょうど4カ月が経とうとしています。今でも多くの人々が避難所生活を強いられており、長引く避難生活が心身の健康に与える影響も懸念されています。

ファンケルでは、震災発生直後から今私たちにできることは何かを考え、義援金や支援物資提供などさまざまな支援策を打ち出してきました。

そして現在、中長期的な支援策として、私たちの持つ美と健康の商品や独自の技術を生かして、被災地の人々の心と体を応援する“美と健康の Save the 東北プロジェクト”のもと、従業員が積極的に参画しています。

今回のニュースレターでは、避難所の現状を受けて、東日本大震災の復興を支援するファンケルの中長期的な取り組みをご紹介します。

＜震災発生直後のファンケルの支援内容＞

	拠出内容	内容	寄付先
1	義援金・従業員寄付金	5,484万8,000円	日本赤十字社
2	2010年度お客様ポイント寄付	459万6,000円	公益社団法人 日本フィランソロピー協会
3	物資提供	約60,000点 (化粧品・サプリ・発芽米・肌着等)	宮城県、福島県、茨城県

ファンケルにできること - 日本栄養士会との連携

震災後しばらく、被災地での食事は、支援物資によるご飯やパンなどの炭水化物だけという状況でした。ビタミン・食物繊維が豊富な野菜や、タンパク源となる肉や豆腐が摂れず、必須栄養素の不足が原因で、徐々に口内炎や便秘、体がだるいなどの症状を訴える人が出てきました。

ファンケルでは、中長期的な支援策として、本当に必要とされているところに効果的な支援を提供する方法はないかと検討していたところ、社団法人日本栄養士会(以下:日本栄養士会)の活動を知り、ビタミン・ミネラルなどのサプリメントや発芽米・青汁などの機能性食品を支援物資として、日本栄養士会に提供することを始めました。

ファンケルの健康食品事業は、安心・安全で品質の高い健康食品を毎日続けられる低価格で提供し、足りない栄養素を補給したり、食品の機能性を活用することで健康の維持や病気の予防に役立てたいとの目的でスタートしました。一方、日本栄養士会は震災直後から現地に栄養士を派遣し、状況を正確に把握しながら支援を行っています。両者が連携することで、被災者一人ひとりの栄養・健康状態に応じて、その人にとって必要なサプリメントを届けることが可能になりました。これは、ファンケルの健康食品事業の根底の哲学に通じる支援の形です。

今回は、日本栄養士会の迫和子専務理事に、日本栄養士会の支援活動の概要と、現地の方々にも今何が一番必要とされているか、今後どのような支援体制を確立していくべきかについてお話いただきました。



迫 和子氏 さこ・かずこ
 社団法人 日本栄養士会
 専務理事

実態把握から必要な援助へ

「震災発生直後に、この災害はこれまでになく被害が甚大であると予想し、日本栄養士会が組織をあげて支援に取り組むと決めました。3月15日には日本栄養士会の中に対策本部を立ち上げ、お金、人、モノの3つの柱を通じた具体的な支援の方法を整えました」。迫さんは当初の様子をこう振り返ります。

迫さんは組織としての支援体制を整えると、3月26日には大きな被害を受けた宮城県に赴き、実際の被害状況を確認しました。賛助会員などから支援物資を募るなどの活動を始めたものの、食糧の支給は当初国が一元管理をしていたこともあり、物資を必要とされているところに直接届けるのは困難な状態でした。

迫さん：「震災直後に家庭医療のお医者さんたちの団体が被災地の緊急医療支援を始めており、栄養士会も一緒に支援活動をやらないかと声がかかり、寝袋と水と食糧

の入ったリュックサックを担いで現地に入りました。まずあちこちの避難所の食事状況を確認したのですが、1日3回のところもあれば2回のところもあり、ライフラインが寸断され毎日冷えたおにぎりばかりという状況でした。お湯さえ用意できない避難所に、お湯を注いで食べるアルファ米やインスタントラーメンが支援物資として大量に届けられ、食べることができないまま積み上げられているなど、避難所の現状と支援物資のマッチングができていない状態を目の当たりにしました」

これを受けて日本栄養士会は、現地の栄養士と協力して、倉庫に滞っている支援物資を整理して使えるものをピックアップし、栄養状態が悪くなった被災者の方々に医師と連携した援助を実施するなど、きめ細かい支援を開始しました。

迫さん：「避難者の栄養状態については、被災当初は炭水化物中心の食事で、たんぱく質やビタミンB1の不足が心配されました。たんぱく質が不足すると、筋肉が落ち、特に高齢者は立ち上がれないなど要介護状態になってしまう危険があります。避難所の生活環境も、自由に動き回れるようなものではないため、寝たきりを作りやすい状況です。また、ビタミン不足では、褥瘡(床ずれ)などの皮膚疾患といった影響が出ます。3食きちんと普通の状態に戻れるまで長期にわたるので、このような状況では、サプリメントなどで栄養バランスを整えるなどの対策がどうしても必要になります」

そのうちに缶詰などが支援物資で届くとたんぱく質不足はやや改善されますが、食事で野菜が出るのは1日1回以下というところが多く、ビタミン・ミネラル・食物繊維が足りない状態が続きました。

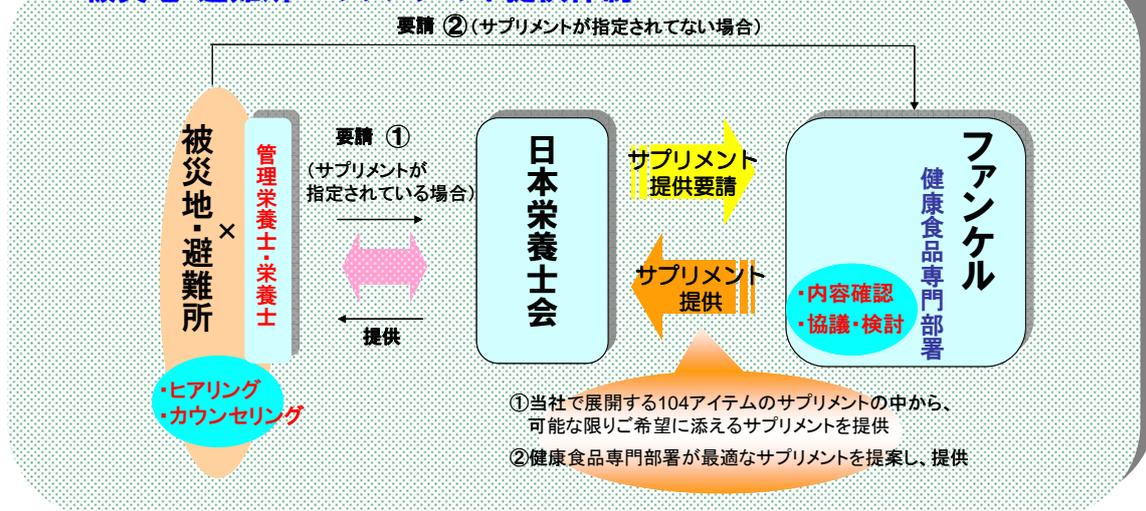
また、調理担当者がいなくて介護ボランティアの方が調理に当たっていた避難所もあり、高齢者や病院の患者さんが避難している避難所の食事の調理に管理栄養士が当たるなど、個々の状況に応じた支援を実現させて行きました。4月の半ばからは、避難所での栄養相談を始め、栄養不足の人に管理栄養士が説明しながら、必要に応じたサプリメントを渡すという個別の支援が始まりました。



被災地・避難所へのサプリメント提供の取り組み

	お届け日	製品	提供先	数量
1	4月19日	サプリメント(ビタミン類)	日本栄養士会の本部より石巻・気仙沼・女川の避難所に配布	1,000
2	4月26日	サプリメント(ビタミン類)、発芽米、青汁(粉末)	岩手県栄養士会にお届け	930
3	5月6日	発芽米おかゆ	宮城県気仙沼保健福祉事務所にお届け	100
4	5月18日	青汁(粉末)	岩手県栄養士会にお届け	300
5	5月20日	青汁(粉末)	福島県県中保健福祉事務所にお届け	47
6	6月21日	サプリメント(ビタミン・ミネラル類)	岩手県栄養士会にお届け	550

被災地・避難所へのサプリメント提供体制



避難所から仮設住宅へ — 今後必要な支援の形

当初は菓子パンやおにぎりばかりだった避難所の配給食が、4月下旬頃からは徐々にご飯におかずのついたお弁当が支給されるようになりました。しかし、これで栄養問題が解決したわけではなく、これまでとは違った性格の問題が生じます。

迫さん：「朝は菓子パンやおにぎりですが、1日1食か2食はお弁当が支給されるようになりました。それでも、野菜は不足がちで、ビタミン・ミネラル不足は変わらない。さらに、これまでの低栄養に加えて、今度は食べ過ぎと運動不足による過剰栄養という逆の問題も発生するようになりました。このような状態ではますます個別のカウンセリングが重要になってきますが、栄養相談に来てくれる人はなかなか増えない。また、毎日お弁当では、飽きてしまい食事が不規則になる人も出てくるのではとの心配も出てきました。食糧が全くない状態から、食べられる状況に改善されても、栄養問題が解決されたとは言えないわけです」

さらに、震災から2カ月、3カ月たつて、避難所が徐々に閉鎖され、仮設住宅への入居が進むと、被災者の栄養管理はますます難しくなってきます。

迫さん：「震災から3カ月が経ち、この間料理を全くしていないと、作る気力もなくなるし、仮設住宅では調理の勝手も違います。料理は作れない、避難所にいるときのように食事届かない、ご近所に知り合いがいない、買い物にも行けない…。このような状態の人には、食べ続けていくことに対する支援が必要になってくると思います」

阪神淡路大震災の教訓から、東北では入居者のコミュニティー作りに配慮した仮設住宅が建設されています。日本栄養士会は、このような仮設集落の中のコミュニティーホールで、お茶会や食事会、料理の講習会にマッサージなどを組み合わせた催しを開き、コミュニティー作りに貢献する活動を検討しています。

迫さん：「食べることで人を呼ぶのは難しいので、被災者の人たちの表情がぱっと明るくなるような、マッサージやメイクなど、他の手法をいくつか組み合わせて、参加していただく。一緒に話をし、その際には必ず、お茶でもいいから何か食べることを一緒にしようと考えていますし、一回きりでは意味がないので定期的開催します。その時できるだけ地域担当の栄養士を決めて、毎回同じ顔が行って信頼関係を作り上げ、一緒に食べて悩みを聞くことが大切だと思います。仮設住宅の人たちは、非常に複雑な心理状態にあると思うので、こうすることによって調理だけでなく心の支援、生きる意欲のお手伝いをしていけると思っています」

《ファンケルの中長期的災害支援の取り組み》～美と健康の Save the 東北プロジェクト～

《テーマ》 被災地とのコミュニケーションをとり、必要な事柄に対し積極的にアプローチし、きめ細かく対応する	
美の領域	健康の領域
<ul style="list-style-type: none"> ・女性を対象にしたメイクサービス ・ハンドマッサージ 	<ul style="list-style-type: none"> ・炊き出しでの青汁の提供 ・栄養士会の現地相談会に同行し、サプリメント相談に対応 etc.

支援活動で企業理念を再認識

物的支援だけでなく、人を介在させた支援の仕組みを独自に作りたい…ファンケルではこのような考えに基づいて、災害地支援活動「美と健康の Save the 東北プロジェクト」を策定し、社会貢献休暇制度を利用した活動を実施しています。栄養士による栄養相談・青汁試飲会に、メイクとハンドマッサージを組み合わせた催しを5月から各地の避難所で開催しています。開催は既に10カ所で10回(2011年7月7日時点)を数えました。



女性の気持ちを明るく引き立てるメイクサービスや、老若男女を問わずリラックスできるハンドマッサージを受けていただいて、長引く被災所生活で心身ともにお疲れの被災者の方々に少しでもお役に立てれば、というのが当初の思いでした。しかし実際に従業員が現地に赴き、被災者の方々と交流して気付いたのは、支援活動に参加することで従業員も多くのことを学んで帰ってくるということです。

「ハンドマッサージは、皆さんに喜んでいただくことができました。

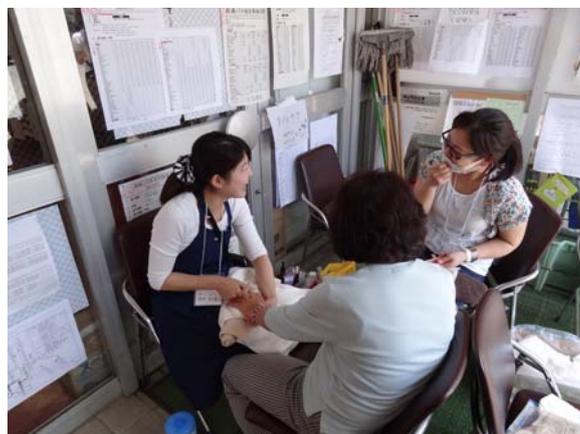
避難所生活が続いて、腰痛や肩こり、疲労感などを感じる方のために、今後はツボも勉強していきたいと思いました。ファンケルとして、現地の方が参加して一緒に何かを生み出したり、少しでも自活のお手伝いになるようなことができないか、と感じました。たとえば、今後予定されているイベントでは、現地のお母さんたちに協力していただく内容を取り入れたり、髪のカットサービスなどでも、現地の美容師さんを探して一緒に活動するなど、今後は一緒に気持ちが前向きになれるような働きかけができれば継続的な支援という意味でよいのかなと感じています」(支援活動に参加した従業員の声)

支援活動を通して、常にお客様のことを考え、不安・不満など「不」のつく言葉を解消するというファンケルの企業理念を再認識した従業員は多かったと思います。物だけではない、人と人の触れ合いを大切に活動だからこそ、刻々と変わる現地の状況を敏感に察し、その時々で求められる支援を考えることによって従業員も成長しているとファンケルは考えています。

今後の活動 - より身近な存在になっていけたら

お肌を触るとその方の健康状態が分かることもあるように、美と健康は密接につながっています。ファンケルでは今後も日本栄養士会との連携を深め、「内外美容」の視点で、被災地支援を継続的に行っていく予定です。

従業員ボランティア活動では、東北地域のファンケルショップのスタッフも積極的に参加しています。地域に寄り添った形でメイクサービスやハンドマッサージをおこない、ファンケルとそこで働く従業員をより身近な存在に感じていただき、新しい縁を築いていけたらと願っています。



ファンケル <社会貢献休暇制度>

ファンケルでは2009年度より「社会貢献休暇」を導入し、地域や社会に貢献する従業員を支援してまいりました。東日本大震災をきっかけに、従業員の社会貢献への活動を更に支援する目的で、「社会貢献休暇」の一部見直しを行い、付与対象者・付与日・連続取得日数を拡大しました。今回の震災支援だけでなく、より積極的に従業員が広く社会貢献に携わることができる環境を整備することを目的としています。新制度導入後の取得者は35名で、取得日数はのべ40日となっています。今後も、従業員に制度を活用してもらえるように啓蒙活動を積極的に行い、主体的に地域や社会に貢献する従業員を増やしていきたいと考えています。